

インド洋の真珠の島・モーリシャスの今昔

モーリシャス共和国

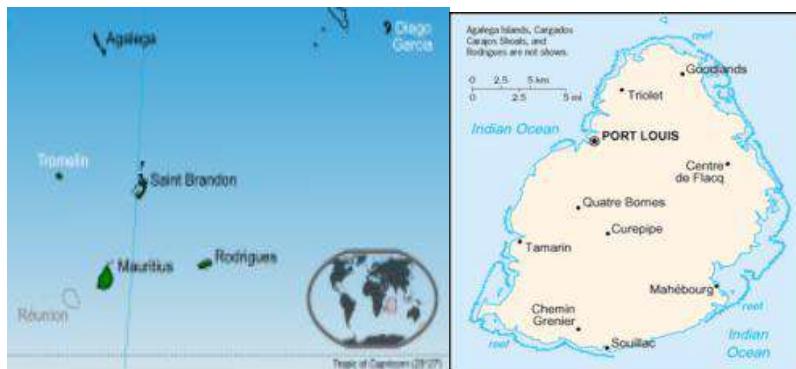
高知大学名誉教授 大野正夫

筆者は、第26次南極地域観測隊・夏隊員として、昭和基地より観測船「しらせ」で、1986年2月に、インド洋のモーリシャス島のポートルイス港に寄港した。帰路の燃料と生鮮食材の補給のためで、5日間の滞在であった。乗員、観測隊員とも全員、「しらせ」船内で食事をして、市街への外出は昼間だけであった。食中毒や治安を考慮し、個人行動は禁止されグループで、市内見物や郊外の観光を行った。一方、在住日本人の船内見学や現地の人達との懇親パーティーが、艦上で毎日午後3時頃より行われた。当時、モーリシャス政府は、日本のインド洋のマグロ漁業を認め、マグロ船の寄港を許可していた。モーリシャスのポールルイス港内敷地に、マグロの加工工場や缶詰工場の操業を許可した。そのために、日本のマグロ漁船は、捕獲したマグロをモールシャス港に水揚げしていた。これらの事業のために、在住日本人がかなりいた。

日本政府はこれらの事業の見返りに、無償で水産研究所を作り、JICA専門家が常駐して、養殖や漁業指導をしていた。寄港中に、エビ養殖施設管理と種苗生産指導をしている根本義正氏（水産庁水産研究所研究員で、JICA専門家）が、「しらせ」に訪れた。彼との面談のなかで、有用海藻、紅藻キリンサイ養殖をモーリシャス沿岸で実施したいと相談を受けた。キリンサイは、寒天に類似のカラギナンの原料になる。1970年代からフィリピンやインドネシアでは大量にキリンサイ養殖を行い、フィリピンでは、キリンサイ生産物の輸出額は、フィリピンの外貨収入の約15%ほどであると言われた。カラギナンの生産工場はデンマークと米国であり、モーリシャスからの輸出も可能性が高いとも言われた。

帰国後、根本義正氏から、今年度のJICA経費で、1か月の海藻資源調査の予算が取れたのでモーリシャスに来てほしいと連絡があり、11月1日から12月2日の期間で、JICA専門家とて、モーリシャスに向かった。今回は、1986年当時の状況と現在のモーリシャス状況を比較しながら、モーリシャス国を紹介する。

モーリシャス共和国の概要



モーリシャスの位置図

モーリシャス国は、アフリカ・マダガスカル島から東へ、900kmに位置しているインド洋にある群

島国家である。本島と小さい3つの島からなる。本島の面積は、ほぼ東京都と同じ面積である。

人口は127万人あまりである。同国で2番目に大きなロドリゲス島の面積は108 km²であり、モーリシャス島の東560 kmの位置にある。3番目のアガレガ諸島は2つの島になっており26 km²であり、モーリシャス島から北に約1000 kmの位置にある。これらの島は主に、漁業がおこなわれている。



インド系住民の多いモーリシャス

モーリシャスの住民はインド人、ヨーロッパ系白人、アフリカ系黒人、中国人である。しかしインド人、黒人と白人の混血系住民は全人口の3分に2と言われており、多様人種国家である。宗教はヒンズー教30%、キリスト教17%、イスラム教と仏教はわずかであり、それぞれの寺院や教会がある。

モーリシャス島は、15世紀までは無人島であり原住民はいなかった。15世紀末に、オランダ人の移民が始まり、オランダ植民地になり、続いてフランス植民地になった。それから独立国

になるまでは英国の植民地であった。フランス植民地時代に、アフリカからサトウキビの栽培のためにアフリカ系黒人が奴隸として移住した。英国植民地時代には、サトウキビや綿花の栽培で、多くのインド人が労働者として移住した。

独立後は、英國連邦国家の一か国となっている。長らく砂糖産業に依存してきたが、1970年代より工業化政策を推進し産業の多様化に成功し、経済は急速に発展した。伝統的産業である砂糖生産、繊維産業及び観光産業に頼る経済からの脱皮を図るため、最近はIT産業への投資等を積極的に進めている。2020年の世界銀行の所得グループランキングでは高所得国に分類された。

また外国直接投資の誘致に力を入れており、投資環境整備に取り組み、世界銀行の Doing Business ランキングは、アフリカで第一位を維持している。アフリカ諸国を中心とした投資協定の締結も積極的に進め、アフリカ地域への投資拠点となることを目指している。



1986年の中心市街地



最近の中心市街地

首都 ポートルイス市街地

国民の平均月間所得は、5～10万円で、アフリカ圏では最も高く、所得の格差が極端ではない。国際紛争への無関与を貫き、隣国との緊張がなく、常備軍を持たない数少ない平和な国である。モーリシャスの排他的経済水域(EEZ)は、インド洋のうち約 2,300,000 km²を占めている。ただし、このうち約 400,000 km²はセーシェル国と共同管理している。

モーリシャスの歴史

1505 年にポルトガル人が、モーリシャス島に上陸して無人島であるという報告がある。その後 100 年間の記録はない。1638 年にオランダがインド航路の補給地として植民を開始した。オラニエ公マウリツツ(マウリティウスを英語読みでモーリシャス)の名前より、この島を命名した。オランダの植民地統治によって、サトウキビ農園経営が、労働力としてアフリカ奴隸により行われた。しかし植民地経営はうまくゆかず、1710 年にオランダはモーリシャス島から完全に撤退した。

フランス領フランス島

オランダがモーリシャスから撤退すると、フランスがサトウキビ事業を引き継ぎ、1715 年にフランス島と名付けた。1735 年には港町であったポートルイスを首都として、多くの施設を作り、現在のモーリシャスの市街地の基盤を作った。この時期のモーリシャスの経済の主産業はサトウキビ農園であり、その労働力は、アフリカから多くの奴隸が移入された。

イギリス領モーリシャス



グランド・ポートの戦い（絵画）



平原を埋め尽くすサトウキビ農園

フランス島は、1810 年にグランド・ポートの戦いで、イギリスに占領され、1814 年には正式にイギリス領となり、島名は旧名のモーリシャスに戻された。

しかしイギリス政府は、モーリシャスの統治体制に手をつけず、本国からの移住も行われなかったので、島の支配階級であったフランス人農園主は、そのまま島に残り、言語も英語よりフランス語が主に話される時代が続いた。1835 年にはイギリス議会によって可決された奴隸解放が実行に移され、それまで農園などで働いていた奴隸達は自由を得た。奴隸解放によって不足した労働力を補充するために、インドからの移民が開始され、1861 年にはインド人系住民は、モーリシャスで最も多い民族となっていた。これ以後は、労働力の増大でモーリシャスのサトウキビ農園と製糖産業が発展した。

当時のモーリシャスの主産業は、国内農地の約 90% のサトウキビ栽培と製糖産業であった。製糖業は 1970 年までは、モーリシャスの唯一の加工産業で

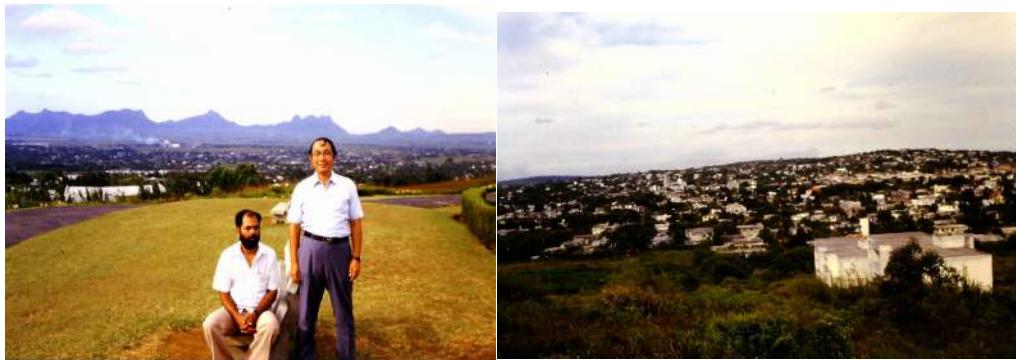
あった。独立以降は、農民の余剰労働人口が、他の工業に振り向ける基盤となつた。

モーリシャス共和国

1968 年に英連邦王国として独立した。独立時には農民の失業率に悩んだが、1970 年代に、積極的な産業振興政策を進め、綿花栽培と繊維産業、漁業と水産加工業や観光業の発展で経済成長を実現した。

1992年には立憲君主制から共和制に移行し、モーリシャス共和国となった。モーリシャスは、1968年の独立政府以降、常に選挙を通じた政権交代を実現してきており、議会制民主主義が定着した。政治的に安定した国となり、国際法を遵守するアフリカ随一の民主主義国家となっている。

モーリシャスの地形と生活



丘陵の住宅地から市街地を望む(左:カントーパート) 丘陵に建つ住宅街

モーリシャス共和国の国土は 2040 km^2 で、世界 169 位の小さな国である。主島であるモーリシャス島は東京都とほぼ同じ。その付近の島々で構成される島国である。島々の周囲は珊瑚礁で囲まれている。モーリシャス島は火山島あるが標高が低く、最高峰のラ・プチ・リヴィエール・ノワール山で 828 m である。モーリシャス島は、海岸部の平野と標高 200m程度の高原(丘陵地)の 2 つの地域に分けられる。

首都ポートルイス市街地は、港を中心に平地に多くの建物が並び、官庁、会社、公園、学校、各種施設、工場や商店街があり、市外地に低所得家族の家がある。1986 年に訪れた時は、大きなビルがなく、密集した市街で、丘陵地には、一個建ての住宅や公園になっている。植民地時代から現在まで、このような二つの地区がてきた。現在は、ネットの写真であるが、高層ビルが立ち並ぶ市街地になっている。

市街地に比べて、丘陵地は風もあり湿度が低く清涼感が感じられた。平野と高原の間には急崖もあるが、いくつかの山々を除けば、モーリシャスは平原と丘陵地の国である。

気候と海況とキリンサイ養殖試験

モーリシャスで 2 番目に大きなロドリゲス島は、モーリシャス島の東 560 km の位置にある。アガレガ諸島は二つの島は、モーリシャス島から北に約 1000 km の位置にある。カルガドス・カラホス諸島は多くの砂洲や岩礁で構成される小さな列島であり、モーリシャス島の北東約 430 km に位置し、これらの島々は、主に漁業がおこなわれており、本島に魚介類は運ばれている。

主島の海岸はリゾート区域であり、キリンサイ養殖は、漁業が盛んで、漁民が多いロドリゲス島

を選んだ。島へは、毎日、小型機が定期的に運行していた。



ドリゲス島への定期便の小型機



キリンサイ養殖する予定の海岸

モーリシャスの気候は一般的に熱帯であり、時折サイクロン(暴風雨)があるが、被害が出るほどではない。季節は夏と冬の2つである。11月から4月までが暖かく湿った夏であり、平均気温は24.7 °Cである。6月から9月が比較的涼しい乾燥した冬であり、平均気温は20.4 °Cである。海洋性の気候であり、季節間の平均気温の差はわずか4.3 °Cに過ぎない。最も寒い月は7月と8月で、夜間の最低気温の平均が16.4 °Cである。キリンサイ養殖には、最適な環境条件であった。年間降水量は海岸沿いの900 mmから、中央高原の1500 mmの範囲である。顕著な雨季は見られず湿度が低い。降雨のほとんどは夏の数ヶ月に起こる。沿岸域の海水温は22 °Cから27 °Cの間である。中央高原は、周囲の沿岸域よりも涼しい。モーリシャスは常春の国と言える。



キリンサイ養殖地調査(写真中央に3人いる)



養殖したキリンサイ葉体を持つ筆者(左)

ドリゲス島には、広大な遠浅の海岸がある。キリンサイ養殖試験をした結果、葉体は成長速度が速くて良質な品質になることが分かった。2週間滞在し、島内の海岸線をワゴン車で走り、数か所のキリンサイ養殖適地を決定した。2023年のFAO海藻生産情報で、モーリシャス国からのキリンサイの輸出が記述されている。長い間、キリンサイ養殖が実施されていることを知った。

ロドリゲス島柔道大会



ロドリゲス島に滞在中に、島内の柔道大会があった。モーリシャスのスポーツはサッカーが一般的であるが。次いで子供達から大人まで人気のあるのは柔道である。主島にはいくつもの道場があるそうだ。

日本のマグロ船の乗組員が、ポートルイスに寄港中に、柔道を教えたのが始まりと聞いた。

ロドリゲス島では、最も人気のあるスポーツは柔道のようだ。

子供達は、皆、本格的な柔道着で試合を行った。国際柔

道大会と同じ日本語のルールであった。そこで、この機会に優勝カップを進呈しようと思い立った。島内の店で、カップが調達できて、優勝者にはOHNO杯を授与した。

モーリシャスの経済

IMF 統計によると、モーリシャスの 2018 年の GDP は 142 億ドルである。1 人当たりの GDP は 11,206 ドルで、アフリカ諸国全体では、南アフリカについて、第 2 位ある。

モーリシャスの主要産業は砂糖であり、独立以後 1975 年までは総輸出額の 85%以上を占めていた。しかし 1971 年から始まった EPZ(本島の輸出加工区)における製糖産業、繊維産業、水産加工業を中心とする輸出型工業の発展により、堅実な経済発展を遂げた。独立以前は慢性的な人口過剰に苦しんでいたが、繊維産業、水産加工業の急速な発展により、1980 年代後半には完全雇用を達成し、1991 年の失業率は 2.7%にまで低下し現在に至っている。

モーリシャスは、日本にとっては、遠洋マグロ漁業の中継・補給基地として重要であり、日本漁船が多く停泊していた。現在はタンカーや貨物船の寄港が多い。2014 年度の日本のモーリシャスからの輸入品のうち 44.3%はマグロであり、また 20%が繊維でだった。現在のモーリシャスは、日本からの輸入品額は乗用車が、50%以上を占めている。民主国家モーリシャスは、主要産業である製糖、繊維、水産加工から、観光、貿易、金融への産業の多角化を図ることで発展を遂げた。

現在は、従来の対欧州貿易に加え、アフリカ諸国への投資拠点・ゲートウェイとなるべく、アフリカ戦略を掲げている。モーリシャス周辺の海域は好漁場であることから漁業も盛んであり、近年、カツオ・マグロの加工品の輸出が、モーリシャスの輸出総額の約 10%を占めている。

モーリシャスの観光業

製糖業・繊維産業・水産加工業と並ぶ、もう1つの主要産業は観光業である。サー・シウサガル・ラングーラム国際空港へ、大型旅客機によるヨーロッパからの直行便が就航するようになり。2005 年には観光客数は 757 万人を数え、モーリシャスの GDP の 16%を占めた。観光客の多くはヨーロッパから訪れており、中でもフランスからの観光客が全体の 30%を占めて最大勢力となっている。

まだ、モーリシャスはアジアは遠い国であり、日本からの観光客は少ない。大型旅客機の直行便が多くなれば、中国、日本、韓国、東南アジアからのツアーも増えるであろう。モーリシャスは多民

族国家であるので、リゾート地域で海水浴が楽しめて、西洋料理、インド料理、日本料理と多様な料理が賞味できる常春の国である。美しい景観とともに、カジノや競馬もある。

大型貨物船の座礁事故

2020年、わかしお丸の座礁石油流出事故に見舞われた。8月6日、モーリシャス政府は環境緊急事態宣言を発表し、周辺国(地域)や日本政府に対して全面支援を要請したわかしお号は、パナマ船籍のばら積み船(載貨重量 20万3000トン)の大型貨物船で、岡山県の海運会社「長鋪汽船」の子会社「OKIYO MARITIME CORP.」が所有しており、海運大手の商船三井がチャーターして運航中だった。約1000トンの重油が流れたが、インド洋に面し波浪が高く、遠浅の海岸で座礁が起った。観光客が集まるリゾート海岸とは反対側であり、観光業には直接の影響はなかったが、自然環境破壊として大きく取り上げられ、漁業被害は生じた。この事故の回復には、日本政府や日本のNGO団体が多く協力して、現在、海岸の景観は回復しつつある。

日本が果たしたモーリシャスへの貢献

モーリシャスの大型貨物船の座礁は、日本で大きな話題となったが、モーリシャス国の経済・産業、スポーツや文化に果たした日本の貢献は、日本国内ではあまり知られていない。1980年代のマグロ漁船の寄港が、モーリシャス国の砂糖の単一産業から、繊維、水産加工の産業を興す起爆剤になった。新鮮なマグロや魚介類の料理はヨーロッパ観光客には好評であった。冷凍マグロが日本で多く売られるようになったのは、インド洋マグロの冷凍工場がモーリシャスに出来たからである。

私がモーリシャス滞在中に、二人のJICA専門家にお世話になった。一人は自動車道整備の指導をしていた。もう一人は食品衛生の指導をしていた。二人のJICA専門家の奥様が、「モーリシャスは住み良い国」とたびたび言われたことが強く印象に残っている。モーリシャスの現在の経済、生活環境、スポーツの向上に、日本は多大の貢献をしてきたことを報告したい。私のJICAカンターパート(世話係)は、水産研究所の研究職員で、黒い顎鬚のインド系モーリシャス人であった(写真に示す)。モーリシャスは、人口120万人の小さい国であるが、国立の総合大学がある。彼は理学部生物学科の出身で、指導教官がイギリス人の海藻学研究者であった。滞在中に彼の指導教官に会い、海藻の種名などの教示を受けた。

私がモーリシャスにJICA専門家として派遣されたのは、彼の強い要望があったことを根本義正氏から聞いた。後に彼から「息子を日本の大学院生として送りたい」という手紙をもらったが、実現できなかつたのが心残りである。

(大平山。三里史談会、51号、2025、高知。より、転載)